耳鳴り

源雪風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
耳鳴り

【Ｎコード】
Ｎ９８７７Ｌ

【作者名】
源雪風

【あらすじ】
耳鳴りが人から人へ次々と感染していく。
最後に耳鳴りの餌食になったのは・・・。

「あ、始まった。」
「えっ、何が始まったの。」
「ピーって音がする。」
「それ、耳鳴りじゃん。」
「あ、やんだ。」
「ちょっと、今度はあたしが耳鳴りするよ。」
「こらお前ら、授業中だぞ。静かにしろ。」
「ん？おさまった。」
不意にチョークを持つ先生の手が止まった。
「先生、どうしたんですか。」
「耳鳴りが・・・。」
「先生、休んだ方がいいんじゃないですか。」
お調子者の男子がすかさず笑顔ではやしたてる。
「たかが耳鳴りくらいで・・・おっ、やんだぞ。」
「やべっ、俺が耳鳴りしてきた。」
お調子者はうろたえた。
♪き～んこ～んか～んこ～ん♪
授業が終わった。

休み時間のこと。
「おい、佐藤！」
「こっちくんな！耳鳴り移されたら嫌だからな！」
「あ、やんだ。」
「畜生、移されちまった！」
以下同様のやり取りが無数に繰り広げられた・・・。

あっと言う間に放課後になった。

日直の女子が、一人で教室の戸締りをしていた。
みんな、彼女に耳鳴りを移して帰った。
「これじゃ誰にも耳鳴りを移せないじゃない。」
独り言は虚しく教室に響いた。
その思いが天に届いたのか、耳鳴りがやんだ。
安堵した彼女は仕事を終えて帰ろうとした。
その時、無人の教室から声がした。
「始まった・・・。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9877l/

耳鳴り

2010年10月15日00時37分発行